

My Days in NIUE Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6075

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



南海遊録—ポリネシア ニウエ島¹フィールドノート— (5)²

My Days in NIUE Island

馬場優子

1995年5月30日(火)

先日ジョーゼフ・ジャクソン氏他界の時の香典はハクブ村だけで1600ドル³集まり、遺族はそのすべてを村のエカレシア教会へ寄進した。それは教会堂のカーテン取り替え等の維持費に費やされるほか日曜学校や婦人会に配分されるそうだ。

今日は喪明けの宴会が行われた。テーブルに並んだ大量の食物は遺族のほかハクブ村内外の多くの家族からの提供物である。牧師や島の有力者たちの長い祈祷や挨拶の間、空腹に耐えに耐えた人々が食事の段となるとどっと食物に殺到し、我先に取り合う様はいつもの光景だ。置いてある紙皿に少しずつ取るのは子どもぐらいなもので、大人の多くはテーブルの上の大皿から葉やホイルの包みごと取って行く。ボウルに入ったサラダなどは手でわしづかみにして取る。バナナの葉で作った皿に味の異なるものも、汁物も乾燥したものも区別することなく入れてゆく。人間の食べ物とは思われない。それで

¹ ニウエ島は南太平洋上の南緯19度、西経169度に位置する孤島である。隆起サンゴ礁島であるため、島の周囲は海拔およそ28mから69mの切り立った断崖に囲まれている。島の面積は約260平方キロで13行政村落から成り、最大人口を擁する村アロフィに行政府が置かれている。本稿は1994年から1995年にかけて行ったフィールドワークの日記の一部である。

² 「南海遊録—ポリネシア ニウエ島フィールドノート— (1)」は『コミュニケーション文化論集』第7号(2009.3.18発行)に、「同(2)」は同誌第8号(2010.3.20発行)に、「同(3)」は同誌第9号(2011.3.20発行)に、「同(4)」は同誌第10号(2012.3.19発行)に掲載。

³ 通貨はニュージーランド・ドル。

も人々は手当たり次第に豚肉も魚も何もかも競争で取る。中には大皿から直接口に入れたり、持参した籠に入れる者もいる。だから女たちは乾燥したパングヌスの葉で編んだ、取っ手と芯に針金を入れた丈夫な籠を作ってもってくるのだ。これなら食べ物がたくさん入れられる。そしてこの籠にご馳走をゴミ箱に捨てるかのように放り込むから自分の家では消費できないほど取り込んでしまうことになる。人間は食べきれないから結局は豚の餌になる。無駄にはならない。

1995年6月1日（木）

貨幣経済の浸透したこの島では多くの成人男性が農業のほかには常雇いや臨時雇いによる政府機関の仕事、あるいは漁業、商業等に携わっているが、中には農業を専業とする者もいる。今日はその一人であるアロナ（50代）にインタビューすることになっている。彼は早朝からブッシュに出掛けるから朝7時に来るようにというが、私は7時少し前に彼の家に着くように出掛けた。約束の時間より多少遅く訪問するのは日本式だが、ここでは少し早目がよい。もうすでに待っているか出掛けた後ということもあるからだ。彼はベランダに置いてあるベッドに横になっていた。妻のポタもそばの椅子に腰かけて待っていた。

この島の成人男性たちは政治に関わる人々を除いて全般的にシャイで遠慮深く、口が重い。よそ者に対して非常に警戒的である。いつも怒っているような表情をしているといってもよい。初対面の相手やあまりよく知らない外来者に面と向かって話をするのを嫌い、できるだけ対面するのを避けようとするし、話をする時もそばを向いていることが多い。こちらから挨拶をしても、人の良さそうな顔で挨拶を返してくるのではなく、怒ったような、勿体ぶった態度で返してくる。これは彼らの社交性のなさからくる無愛想さであって決して悪意のある怖い人たちなのではない。外来者にあまり慣れていないのだ。アロナもそのタイプで、口が重く、鈍重な調子でインタビューに答えてくれた。彼は、あまり人と話したくない、ブッシュで黙々と働いているのを好むといった感じだ。私の質問にもそばで女房のポタがハキハキと答えてしまう。私のインタビューが終わるや否や、車を駆ってブッシュに出掛けていった。それでも彼は日曜日にスーツを着て聖書や賛美歌集を小脇に抱えて教会にやってくる姿は様になっているし、礼拝で交代で行う司式や説教、

祈祷では見違えるばかりに堂々たる態度で立派に務めている。

島の人々の現在の服装は性別や行く先別で異なる。ブッシュに行く時はいわゆる野良着姿で、男は汚れた短パンにTシャツ、裸足だが、ゴム長靴を持って行き必要な時に履く。女も似たような格好だが短パンではなくスカート姿だ。最近では若い男の間にツナギ服で決めている者も現われた。

教会の日曜礼拝には晴着姿で行く。これはキリスト教伝来の時、宣教師たちに教義のみならず行動の規律をも教化された結果である。女はスーツなしワンピースに靴を履き、バッグを持って行く。鍔のある帽子も被らねばならない。男はスーツあるいはシャツにズボン、靴を履いて行く。子どもたちも髪形から靴まで最大限にヨーロッパ人風におめかしして行く。そして帰宅するや否や晴着は脱ぎ捨て普段着に着替える。女はTシャツにスカート、男は上半身裸に腰布（ラヴァラヴァ）だ。これが彼らの最もリラックスできる服装で、眠る時もこの姿のままである。寝衣というものはない。

首都である大きな村アロフィに出掛ける時は若干身なりを正して、男はシャツにズボン、靴を履き、女はTシャツとスカートだが靴を履き、バッグを持って行く。

近所の女ラヘラ（60代）が家の前の花壇の手入れをしている。いつも美しい色の花々であふれているが、今日は所々が崩れ、花が倒れている。先週土曜日の夜、向かいのタパイタの家の30代の孫息子ノガが酔って車を運転し、ラヘラの花壇に乗り上げて植え込みを荒らしてしまったのだ。

あの夜、狼の遠吠えのような奇怪な叫び声がタパイタの家の方角から聞こえてきた。人々が道に出てきて、気味悪そうに「何だ、何だ」と言い、タパイタの家の方に見に行くと「ノガがまた・・・」と口々に言っていた。しばらくして止まったかと思うとまた聞こえてくる。悲しげな、尾を引くような叫び声だった。翌朝にはもうノガの話は村中に広まっていた。祖母の家に住んでいるノガがフィジーに住む先妻のところに行っている間に、現在のガールフレンドが別の男とどこかへ行ってしまったことが事の発端であった。あの長く引く叫び声は“呪い”であるとラヘラは言う。“呪い”とか“呪う”はここでは文化的にきわめて重要な意味を持つ。ラヘラは花壇を壊されたことと合わせて非常に気分を害していて、法廷に訴えると息巻いていた。しか

し、我が家の主婦メレは、訴えても事情が事情なので情状酌量になるだろうという。

アロフィのヘレ&イキマ夫妻の家へ行ったら見たことのない若い palagi (白人) が出てきた。ヘレたちは NZ のダニーデンへ行ったのでその間この家を借りているという。この白人は Peace Corps でマサチューセッツからやって来たアメリカ人で、ニウエのハイスクールで3年契約の体育教師を始めたばかりである。この島の存在は今まで全く知らなかったが気候が気に入っているという。このアメリカ人が男性か女性か、夜、クラに聞くまで分からなかった。女性だそうだ。

クラによると、イキマは飲酒癖がひどく、そこから自分を救うには聖職者になるほかなかった。そこで聖職者を志望する島民が教育を受けに行くダニーデンの神学校へ妻子ともども行ったという。何年か後には彼も pastor として島に戻ってくるだろう。そういえば先週、問題を起こしたノガの兄のランギもダニーデン神学校で3年間の研修を受けて婚約者を伴って牧師として帰島したが、彼も30歳を過ぎてから、今後の人生は神に捧げようと一念発起してダニーデンへ行ったそうだ。

私の居候先ヴァイレレ家には、2年前に初めて来島した時、マリイというハイティーンの少女がいた。彼女は夫クラの血縁者で実家は3軒隣りにあるがクラの家に里子のような形で住んでいた。その後、彼女は NZ へ行ったが病気になり、そのまま NZ の失業給付を受けながら闘病生活を続けている。現在、この家にはマリイに代わってクラの弟の娘ファネ (11歳) が養女のような形で住んでいる。メレ&クラ夫妻の実子は3人のみで、成長した長男が幼い子をほしがったのでファネを預かったとメレは言う。ファネの両親は子だくさんのため生活が苦しいので口減らしになり、クラの家族としては働き手が増えて助かる。実家は2、3分の距離にあるがファネの生活の場はヴァイレレ家である。

メレは事あるごとにファネを批判しマリイと比べるので、それを聞くと彼らの若い女性や子どもの理想像が浮かびあがってくる。メレはファネを怠け者だという。来客があるとそばに座って聞いているが、子どもは奥に引込んで皿洗いや片づけをするべきだという。ファネは指示されないと家事をやら

ないが、言われなくても自分から進んですべきである。それに比べてマリイは、学校の成績は悪かった（結局、中退した）が働き者で、大人たちが外から帰ってくるといつも食事の用意をしてあったと褒めている。家事労働の担い手として子どもは重要視されているのだ。

ヴァイレレ家の一人娘キリ（20代）は未婚の母だが生活資糧をどこから得ているのか分かりにくい。定職は持たず、ヴァイレレ家とは道を挟んだ向かいの、親戚の空家を娘シアヒ（1歳半）との住処としている。本人は実家からの金銭的援助は全く受けていないというのが自分で稼いでいるわけでもない。実家にしばしば顔を出してその辺りにある食べ物を勝手につまみ食いしてゆく。娘シアヒに関しては、ヴァイレレ家であれ親戚の家であれ他人の家であれ、その時にいた場所で食べているからキリの負担になっていないようだ。一方、キリは村内の小商店でよくインスタント・ラーメンやジュースの素、ミルク、菓子類、スナックを買っているし、毎週土曜日にはダンス・パーティへ行くから現金が必要だ。それはどこで手に入れているのか。仕事はTシャツやラヴァラヴァの染色販売ということになっているが、ここ2週間でそれをしてきたのは2日間だけだ。本人に聞くと「儲かっていないけど構わない」と収入がないことを気にもかけない。

資金源の一部が最近、分かった。結婚しなかったシアヒの実父の両親が、血を分けた孫の養育費として毎月いくばくかの援助をしてくれるのだそうだ。その家族は島でも有力者の一族で土地も多く、裕福である。シアヒの成長した暁にはその家族の土地の継承者の一人となることを期して血縁関係を明示しておく、そのために養育費の一部を払い続けていると思われる。

1995年6月2日（金）

キリが母親メレに言われてタパイタの家へ棒をもらいに行く。100mも離れていない近隣だが出掛けてから帰ってくるまでに1時間以上もかかった。向こうに着いてしばらくおしゃべりしてから用件を持ち出し、その後もしばらくおしゃべりを続ける。ひとまとまりの事を終えるのに途方もなく時間がかかる。

ひとつの事から他の事に移るまでの間の時間も相当なものだ。その間、しゃべっていることもあるがただじっと座って待つこともある。間の取り方が実

に悠長だ。我々にとっては物事をこなすことが重要なのであり間は短いほどよいが、彼らにとって間は前後二つの物事の単なる埋め草というよりも、それ自体が貴重な時間であり、待つこと自体が目的でもあるように思われる。

2週間に1回、教会前の広場で女たちの富くじが行われる。交代で当番になり、当番が大金を一挙に手に入れる。今日の当番はレア（40代）だ。姉のヘニとその親友のポタが手伝っている。開始時間は決まっているのかいないのか分からない。長い時間間隔で人々が三々五々集まってくる。大分集まったところで何とはなしに始まる。掛ける金額が書かれた数種の用紙が回ってくると名前を書き込み、その金額を出して次の人に回す。これにも時間がかかり、ポツリポツリとやっている。同じ用紙が何回も回ってくる。人々は書いたり書かなかったり、途中で気を変えたりする。初めに紙が回って来た時には「お金がないから掛けない」と言っておきながらしばらく経つと「掛けるから紙を持って来い」という者もいる。

やがて当選者の発表が始まるがこれも長々と続く。その後、しばらく時間が空いて当選者たちは賞品をもらった。これだけで約3時間かかった。今日の当番レアは1600ドルも手にした。

賞品はタロイモ、緑色バナナの房、コーンビーフ、手作りケーキその他から成り、分けて積み重ねてある。こうした賞品のうち、タロイモはレアと夫が出品したものだがそれ以外は他の人々が寄付したものだ。自分が当番の時に寄付してくれた人が当番になればお返しに寄付するのが当たり前。こうして互恵的に集まったものが賞品の山となる。

この日、全く当たらなかった人は私を含めて大勢いたが5回も当たった幸運な人がいた。彼女は隣村に婚出したが実家が当村にあるのでこちらの福引にも加わっている。実方の土地や集団とのつながりを婚後も切らない社会だ。

この福引は fundraising と英語で言う島民もいるが慈善とは無関係で日本という無尽そのものである。当番の順番が回ってくれば多額の金を一挙に手に入れることができるので、高額商品を購入するチャンスとなる。そういう意味で出産、誕生祝、男児の断髪式、女児の耳穴開儀礼、婚礼等と同様に蓄財の機能を持つといえる。

私が住んでいる家の主婦メレの当番の時には2000ドル以上も集まったという。大きな電化製品を買う必要もなかったなので、娘と孫がNZへ行く飛行

機代とし、残りは彼女の銀行預金となったとのことだ。

この日、村の女たちがほぼ一堂に会した。20代や30代の若い女たちは輪の中心に座らず、周辺にかたまっている。40代以上の年輩の女たちが輪の中心部分を陣取り、活発で元気だ。冗談を言い合い、互いにからかい、ヤジを飛ばし、豪快に笑い、食べ、子どもと犬を叱り飛ばしていた。70代、80代の女のうち認知症の人あるいは耳の遠い人は出てこない。出てきても皆と交わらない。80代のヘムが杖をついて見に来たが、誰とも話さず、しばらく離れて見ていた。女たちも近くで遊んでいた子どもたちも全く彼女を無視。それはまるで彼女がそこにいないのに、存在に気づいていないかのような態度だった。

1995年6月3日(土)

今日は彼らのブッシュ・デイつまりブッシュで働く日である。首相も大臣も議員も公務員も他の仕事に就いている人もみな土曜日はブッシュへ行って農作業をする。

1995年6月4日(日)

日曜礼拝の最中のことだった。ラヘラが預かっている孫娘(7歳位)が礼拝中、座席の通路を歩き回っていた。彼女が祖母ラヘラのそばを通り過ぎる時、ラヘラは持っていた団扇で彼女をバシッと強く叩いて注意した。彼女はいったんは通り過ぎたが後戻りして祖母のそばに来た。逃げようと思えば逃げられたのにそれをしない。ラヘラも強引につかんだり追いかけたりしたわけではない。それにも拘らず孫娘は祖母のそばに戻って来た。するとラヘラは彼女をぐいっとつかんで木製の椅子に叩きつけるように突き飛ばした。孫娘はかなり痛そうで涙ぐみ、うつむいてしくしく泣き出した。するとラヘラは彼女の頬を平手打ち。さらに泣き続けようとする彼女に一層のビンタをくかわせる。孫娘は懸命に泣くのをこらえていた。

祖母もこのように孫を非常に厳しくしつけるのが一般的だ。子の教育方針の決定権は両親にあると考える我々とは異なり、祖父母も子のしつけには両親と同等の役割を果たしている社会だ。

1995年6月5日（月）

エリザベス女王の誕生日なので NZ の傘下にあるこの島も公休日である。

朝、マヒネ（女 30代）の家に行く。母親のロタのみが在宅中でパンダヌスの葉を編んでいた。裏庭に回った時、一室に物が雑多に放り込まれているのが見えた。道路側の居間は片付いているが裏はやはりすごく乱雑だ。ロタと話していたら孫のヘガ（男 中学生）が起きてきた。彼は居間に昨日から放置されていたと思われるカップとスプーンを取りに来た。その後、彼は朝食のスナックを買いに隣家の小商店へ行った。

1995年6月6日（火）

WHO スヴァ支部勤務の日本人、須賀氏と昼食をとる。彼は、HIV 等性感染症（STD）予防計画の一環で太平洋諸地域に派遣され、この度ニウエに医療関係者を対象としたワークショップのために来島した。

須賀氏は、ニウエ島には今のところ危険な伝染病は発生していない（STD に関しては数年前にクラミジア感染が1例あったのみ）という。何故なら孤島であり、周囲から隔離されているし、空気その他の自然環境汚染がないからである。感染症が発生するには病原菌と媒体双方の存在が必要条件だが、ニウエは衛生環境は悪いが病原菌がないので不衛生がもたらす病気は今のところ発生していないという。すると、一旦、病原菌が持ち込まれたら、手洗いの習慣がなく、手づかみで食物を食べ、汚い水で食器を洗い、沢山の媒体になり得る小動物が周囲にいて彼らと食べ物を share しているこの衛生環境では危険は並大抵のものではあるまい。現在の環境がいつまで続くのか心配になる。

須賀氏の話で面白かったのはコーンビーフの件だ。須賀氏（S）とオーストラリア人でオセアニア各地にコーンビーフを輸出している男（O）との会話：

- S 「お前やお前の家族もコーンビーフを食べるのか？」
- O 「あんな脂肪と塩分だらけのくず肉なんか食べるものか」
- S 「そんなひどい食べ物を何故オセアニアで売っているのか？」
- O 「オーストラリアではもうスーパーに置けない。スペースをくれないんだ。だからポリネシアやミクロネシアに持って行って売っている。

あっちでは売れるから。」

1995年6月7日(水)

午前3時半頃、家の前に1台の車が停まった。ガラガラと開くドアの音からこの家の長男ネリの青いヴァンであることが分かる。誰かが何かを持って家の中に入り、台所へ行って何かを置くと、また出て行った。ネリがヤシガニ狩りの後、獲れたヤシガニを両親の家に持ってきて黙って置いていったのだろう。昨日もネリは数匹のヤシガニを届けに来たから。

やはりそうだった。今日は10匹位届けられた。昨日の夕飯もそうだったが今日の夕飯もヤシガニとタロイモに違いない。

1995年6月8日(木)

この週の土曜日は村の祭りの日だ。その日は大量の食物をつくって販売するので村の人々はその準備のために忙しくなってきた。ヴァイレレ家でも夫クラ、妻メレ、養女ファネの3人が早朝からタロイモなどの収穫のためにブッシュへ行った。10時頃一旦戻ってきてパンと紅茶で朝食を済ませ、一休みして午後2時から4時まで再びブッシュで農作業にいそしんだ。平常に比べて持ち帰る収穫物が格段に多い。

祭りに付随して村の女たちが製作した布を使った手芸品(刺繍、染色、アップリケ、パッチワーク)が旧小学校校舎に集められ、コンテストが開かれた。メレはそちらへ行ったので私も一緒に行く。

会は3時半からと通知があったようだが、2時頃には多くの人が集まっていた。ここでは集まりというと1時間以上も早く来て待っている人もいるし、何時間も遅れてくる人もいる。お互いに何時に来るかなど気にもせず、集まった人々はゆっくりと座り、しゃべり、笑い、遅く来る人を待っている。また大人が集まると必ず子どもも集まってくるし、犬たちも集まってくる。

教室を三つ使って作品が展示された。一人ずつ番号が決められて全出品物に番号札が付けられる。公平を期するために氏名を隠して番号だけで審査されるのだ。しかし実際には誰がどの作品をつくったか、みなお互い知っている。審査結果には村の中での力関係が反映されているように私には思えた。作品は全体として色の配合は私の目から見て素晴らしいとはいえないが、フ

ランス刺繍の目が細かく美しく仕上がったものが目立った。

村祭りは Village Show Day といわれている。毎月、各村が交替で行う。島には 13 カ村あるので、各村はおよそ 1 年に 1 回 Show Day を開催することになる。これは現在、人々が最も熱意をもって取り組んでいる 28 年前に始められた行事である。当初は食糧が豊かではなく、収穫物を持ち寄って品評会をすると同時に食物を作ってきてみなで食べる日として始まった。これをどの村も行うようになり、毎月、交替で開催することになったのである。

人口が多かった 1980 年代には自転車のロードレースやマラソンもあり、活気に満ちていたが、最近は人口流出によりやや規模が縮小したという。村にもよるがハクプ村は人口が比較的安定しているため活気がある。食物などの販売や模擬店、農作物や手芸品の展示即売やコンテスト等々が行われるほか各種のスポーツ大会もそれに付随して行われる。明後日にいよいよハクプは今年の Show Day を迎える。

1995 年 6 月 9 日（金）

朝から我が家の主婦メレが鍋やオープン・プレートを盛大に洗っている。何か月か何週間か前に使われ、汚れたまま台所の片隅に重ねられていたものだ。使った後、そのままにしておき、次に使う時に洗うのだ。洗いは食器類と同じで、洗剤入りの汚れた水に浸け、出して布巾で拭きただけである。汚れていた時代に猫その他の小動物がその上を歩きまわっていたのだが。

村の人々は明日を控えて大忙しだ。販売用の食物をつくるため、朝からみなアロフィへ買い出しに行く。メレも大量に買物をした。数軒の大きなスーパーマーケットを何度も往復し、鶏 3 羽、ジャガイモ 20 キロ、ラード 5 箱、コンビーフ（1 キロ缶）5 個、等々大分量の買物をした。私は運転手としてついて歩いた。

みな「忙しい、忙しい」と言いながら一つ一つの作業はのんびりやっているし、一つの仕事から他の仕事に移る間の時間もたっぷりとっている。知り合いと会えばゆっくりとおしゃべりし、決して急ぐことはない。

午後、ヴァイレレ家のウム（蒸し焼き）料理づくりが始まった。タロイモやココヤシ、ココヤシ葉その他ブッシュで収穫するものは昨日のうちに夫妻

と養女がヴァンで運び込んできた。アロフィに住んでいる長男のネリと妻イヴァも応援に来ている。いつもは働かない娘のキリも今日は働く意欲が満々だ。

外台所でメレがタロイモの皮をむき、それを夫のクラが座って見守っている。包丁が足りないので一人ずつの作業となってしまう。この夫婦は時々、大喧嘩をして大声で怒鳴り合ったり、数日間ろくに口を利かないこともあるが、家族の共同作業の時は実に気の合うカップルだ。隣で息子ネリがココヤシの果肉を削っている。これはいつもはクラの仕事だが今日は息子がやっている。モーターで動く削り機もあるが壊れているので今日は手で削っている。かなり力を要する仕事でネリは汗を拭いながらやっている。

内台所では娘のキリがドーナツづくりに懸命だ。大型のドーナツで、4個2.50ドルで売るといふ。ネリ夫婦とクラはバラダに座り込みココヤシ葉で大籠を編み始めた。売り物を会場に運ぶにも買ったものを持ち帰るにもこの籠を使うから沢山必要なのだ。私はというと、ポテトチップス用のポテト短冊切りを引き受けた。包丁がないので小さなナイフを使い、まな板もないので樹脂化粧板のテーブルの上でやったが、滑って切りにくい。薄暗い台所で山のようなポテトと格闘した。

キリはドーナツを大量に揚げた後、サラダづくりに入った。キャベツを洗わずに千切りにし、人参も千切り。缶詰の桃を刻み、マシュマロをちぎってそれらと合わせてマヨネーズであえ、それに缶ジュースを入れる。これで甘いポリネシアン・サラダの出来上がりだ。

外台所にウム用の常設炉はあるが小さいので今回のように大量につくる時は戸外に新たに穴を掘って炉をつくる。今日は雨模様なので物置小屋に隣接してトタン屋根をつけた小屋掛けをつくった。主婦メレの采配の下、夫クラと息子ネリが屋根を張り、穴を掘った。穴の底に大きめの石（石灰岩）をいくつか敷く。その上に薪をのせて燃えやすいココヤシの樹皮に火をつけてのせる。その上にココヤシの殻をのせ、火勢を強める。さらに薪をのせ、大きな石（上の石）をのせる。その上にまた薪をのせ、大きな石を置く。3時間後、石は真っ赤に焼け、薪もココヤシ殻も焼けていた。上の石を取り除き、そこに luku と呼ばれるシダで包んだタロイモ、鶏肉その他食物の包みを並べる。その上に焼けて真っ赤になった石を戻して並べ、le の葉でおおう。その上を水に浸した新聞紙でおおい、最後に薪を数本のせて重しとする。これ

でウム料理は準備完了。この後、3~4時間そのままにしておけば出来上がりだ。日付は変わって翌日の午前1時をまわっていた。

これらの作業をする時の人々の厳粛な表情と実に組織化された有機的な動きが印象的だ。タロイモの皮むきから、その包み方を始めとして各種の食材を包んだ物を炉のそばに運ぶにも、焼けた石の中に入れるにも、その全工程が一定のリズムと速度で、厳かに、「勿体ぶって」と表現したくなるような雰囲気をもって行われる。その中心は主婦のメレである。日常的な台所仕事は11歳の養女ファネに任せているが、特別なウムづくりともなるとタロイモの皮むきからしてファネにはやらせない。メレが所定の位置に胡坐をかいで行う。ココヤシの殻ひとつを置くにも勿体をつけている。夫のクラが「それはこっちに置け」とこちらも仰々しく口をはさむが返事もしない。

1995年6月10日(土)

ウム料理の準備が午前1時過ぎに一段落したのでみなごろごろし始めた。幼児たちはすでに居間でぐっすり眠っている。床で、ソファで、思い思いの方向に横たわり眠りこけている。大人たちも居間やバルコニーのベッドで仮眠を始めた。

しかしそれから主婦メレはフライドチキンをつくり始めた。汚れた台所の床に汚い布を敷き、その上に昨日買ってきた3羽の鶏を投げ出す。そして布の上に置いた小さなまな板の上で鶏肉をさばき始めた。私はポテトチップスを揚げる係だったが、何度か揚げた後、一眠りすることにした。着の身着のままだ。そういえば夕食はドーナツ半個だけだった。

2時間ほど眠っただろうか。はっとして目を覚ます。すでにみな起きている。ウム料理は炉から取り出され、炉にはまだ温かい石だけが残っていた。メレは文字通り一睡もせずにフライドチキンを揚げている。汚れた床に胡坐をかいて。揚げ油はラードだ。健康上良くないのだがみなこれが大好きだ。

朝6時頃から村の人々は旧小学校の校庭に売り物や展示物を運び始めた。人々はみな寝ずに準備したに違いない。

この日メレが売ったのはドーナツ、ケーキ、ウム料理各種、タロイモ、ポテトチップス、フライドチキンだ。それに富くじまで売り出している。富くじを売っていた家族は他にもあったが、ヴァイレレ家の賞品の1等賞が豚1頭というのが傑作だ。

メレが一睡もせずに働き、みなに食事をふるまうこともせずに（可哀そうに11歳のファネはお腹がすいてたまらなかっただろう。どこかでつまみ食いはしただろうが）、みなは労働力をフルに使って大量の販売用食物をつくったバイタリティには呆気にとられた。いつもよく昼寝をしているオバサンなのにこの日は昼寝も夜寝もしなかった。この日は作れば必ず売れるということはみな分かっている。そしてどこの家も何らかの売り物を出している。しかし家族をフルに使ってこれほど沢山つくって売った家は数えるほどしかない。

メレはいったい全部でいくら稼いだのだろう。ポリ袋に詰め込まれた紙幣から見て2000ドル位になったのではないか。夫、息子夫婦、娘、養女、そしてわずかながら私の労働力を存分に使って稼いだ大金は誰に分配されることもなく彼女の銀行口座に入った。労働力の搾取という観念はない。そこにあるモノ（物、者）は使ってよい。それは相互的なものである。だから別の機会に主客が逆転して相手の労働力を無償で使う事ができる。たとえばメレが息子や娘の子どもを預かっても報酬をもらうことはない。お札をいわれることもない。相互に相手の労働力を使い合って当然なのだ。

1995年6月11日（日）

この社会の母親の子に対する態度を見ていると、甘やかしと無慈悲さの両極端の側面と一貫性のなさが印象的だ。取り立てて言うほどのことでもない子どもの行動（声がうるさい、チョロチョロと動き回ってわずらわしい、触ってほしくないものを触る、年下のきょうだいが上記のようなことをしているのに注意しない、等）に対して猛烈に激しく大声で叱りつける、平手打ちする、靴を脱いでそれでなぐる、付近にあるものを手当たり次第に取ってなぐる、等をする。一方、子どもが同じことをしても何も言わないこともある。結果、子どもは何が正しく何が悪いことか理解しにくい環境で成長する。良いこと・悪いことの規準は行いそのものではなく、そこにいる大人の態度と表情によって判断するほかないからだ。

子どもたちの行動の特徴はこの点と結びつけて考えられる。怖い、叱る人がその場にいれば絶対にしないようなことも、そういう人がいない場では平気です。そして叱られないと分かると悪行は増長する。「優等生」もその場に誰がいるかによって「ワルガキ」に一変するのだ。「あんなに良い子

が…」と思う経験は数えきれない。

夕方、キリが私のレンタカーを貸してほしいと言ってきた。どこに行くのか訊くと「マイケルの店まで」と言う。それは50メートルしか離れていない場所だ。私は断った。

メレの親戚のパルア（女 40代）が2度電話してきた。いきなり「キリはどこだ!」とどなり声が響いた。2度目の時はキリがいた。車を借りて返さなかったらしい。夜になってまたパルアから電話があった。今度は母親のメレが出た。やはりキリは何かを返さなかったらしい。メレも舌打ちしながら道の反対側のキリの家に向かって大声で叫ぶ。このようにしてキリが何をし、何をしなかったか、そのだらしなさは近所中に知れ渡ってしまう。それでもキリは、怠惰でだらしない事は評判でも村の人々から嫌われてはいない。怠惰さが人格を貶めることはなく、勤勉さが最善というわけではないのだ。むしろ他人への寛容性が重視される社会なのである。

現在、島と外部を結ぶ航空便は Air Nauru（ナウル共和国国営航空）のオークランド（NZ）とニウエを往復する週1便だけである。ナウル共和国はリン鉱石輸出が国の収入の大部分を占めているが、ここ数年でリン鉱石は枯渇することが分かっており、焦りから海外への投資がさかんに行われてきた。しかしそれもうまく行かなくなっただけだ。Air Nauru も経営難となり、今年8月をもってニウエ便の就航を停止すると通告してきたのである。6月末までは従来通り週1便飛ばすが7～8月は月2回のみで、その後は就航しないという。その後、他の航空会社が代替するのか否かは全く白紙状態だ。島から出る最終便は8月18日と決まった。私もこれで島を出なければ日本に帰れなくなる。

1995年6月14日（水）

アロフィ＝ハクプ間の道路で写真を撮っていたらハクプのヘトア（男 50代）がヴァンで通りかかり、「写真を撮ってくれないか。息子たちに送りたいから」という。彼のヴァンを私の小型車が追って彼の広いタロイモ畑に着いた。遠方の大きく育っているタロイモは今年の9月から10月頃収穫の予定で、手前の先ごろ植えたばかりの畑は来年1月から2月の収穫という。このよう

にタロイモが必要となる時期を設定して、収穫までに要する9カ月前に種イモを植え付ける。季節を問わず成長するから水稲耕作のように植え付け時期が決まっているわけではない。一年中、植えれば放っておいても9ヶ月後には収穫できる。そこで各家族は大量のタロイモを必要とする時——村祭りやスポーツ大会、家族員の結婚式や誕生祝い等通過儀礼——に合わせて植え付ける。植え付けと収穫がきわめて計画的に行われるのだ。ただし植え付けと収穫の間の農作業が簡素な点はイモ耕作民に特有なことで、この島でもたまたに除草をするぐらいなものだ。その除草法もきわめてシンプルである。この日、ヘトアはタロ畑に雑草が丈高く生い茂っているのを見て「これを切らないと土の養分がタロにまでいかない」と言いながら雑草取りを始めた。持参したブッシュナイフで雑草を乱雑に叩き切る。ぶった切る、という感じだ。雑草は切れたり折れたりする。それをそのままにしておくやがてそれは土の養分となる、と彼は言う。彼ら焼畑耕作民が畑地開墾の時、切り倒した樹木も雑草も焼き払い、その灰を肥料とするが、除草した草もそのまま利用するのである。

ヘトアはこのタロ畑に新たに家を建てたいと考えている。電気は豚を飼ってそのガスで発電し、水は天水の貯水槽を作るのだという。今のところ、集落に住み続けることを主張している妻を説得できず、集落から通っているが、できることならタロ畑のそばに住みたいという気持ちは捨てきれない。いわば職住近接を考えているのだ。これは彼が幼い頃、人々が現在のように教会堂の周りに定住する前にそれぞれのタロ畑に簡単な小屋をつくって住んでいた居住様式への回帰である。定住後、車や自転車が普及する以前は人々は集落から歩いて、その後は自転車で畑へ通わねばならなかった。現在はほとんどの家が車をもっているか親族の車に同乗できる状態だから、遠い畑へ行くのに不便はない。それでもヘトアは昔のように畑の近くに住みたいと思いつけている。

メレが「針もっていないか」ときいてきた。数日前から探していたがまだ見つからないらしい。彼女は、養女ファネが使った後、そのままどこかへ置き放しにしているに違いないという。

数日前から冷蔵庫に入れておいた私のハチミツの壺が行方不明だ。キリは、ファネが学校に持っていったに違いないというが、ファネは否認している。

以前も同じことがあり、キリの部屋を見たら壇の蓋をしないうで置いてあったのでアリが沢山入りこみ、ハチミツの中で溺れていた。

夜、ネリがヤシガニ狩りの帰途、沢山のヤシガニを入れた大袋をもって実家に現われた。彼は数日前になくしたという財布をまだ探している。

1995年6月15日（木）

クラのファームへ行く。アバセリに向かって道路を進み、イキマの家地を過ぎたところから灌木や丈高い雑草が生い茂る小道に入ってゆく。これは人が通った足跡が小道になったもので、雨の日はぬかるみ、晴れた日は砂塵を巻き上げながら、車はジャンプを繰り返しつつ進む。突然、ブッシュが切り開かれた一画に出た。ここにクラは鶏舎と豚舎をつくったのである。

彼は現在、養豚に力をそそいでおり、鶏舎はあるが鶏は放し飼いにしている。飼料はやらないから鶏は周辺を歩き回って自ら餌を探さねばならない。鶏も自給自足生活をしているわけだ。豚小屋に入り込んで飼料を豚と一緒に食べることもある。卵はブッシュの中、小屋の中、物陰などどこにでも産む。夜は、成鳥は木の頂に飛び上がって眠り、ヒナたちは地上の巣で眠る。

豚舎は立派だ。屋根はトタンだが、NZから輸入した丸太を支柱にし、地元の木材を横木とした手造りである。収入があると木材やトタンを買い、少しずつ建ててきた。仕切りを設けた部分には仔を産んだばかりの母豚が1頭ずつ計3頭入っている。母豚は現在、20頭いる。豚の体毛の色は茶色、茶に黒の斑点、白色、薄茶色、濃茶色、等様々だ。豚は何でも食べる。主な飼料はココヤシだが、ヤシの果肉も外側の殻もバリバリと食べる。人間の残飯も食べる。だから台所の生ゴミはバケツに入れて持ってきて餌にする。何でも食べるうえ際限なく食べる。満腹でもう欲しくない、という状態がない。食べ物を見れば、そこにあれば、与えられれば、必ず食べる。いつも空腹であるかのように見えるがそうではなく、「見ると食べてしまう」のだ。また人を見るとすぐに食べ物を欲しがらる。私が近づいただけで豚たち全員が近寄ってきて口吻を突き出し、よだれを垂らす。最前列に出られないものは仲間の上に乗上げて口吻を突き出す。だから上下2列に並んだ豚の口吻が柵から突き出していることになる。

豚舎と鶏舎のそばで牛も飼っている。生まれたばかりの仔牛を連れた茶色と白のまだら模様の母牛だ。母牛はロープでつながれ草を食んでいる。牛は

食用ではなく、豚・鶏の飼料となるココヤシの林で雑草を食べる役割を担っている。牛が除草を行い、その排泄物がココヤシ林の土壌を豊かにしてくれるので化学肥料は使わない、とクラは言う。

ファーム付近では小柄なハエが飛び回っていた。サシバエだ。刺されるとチクリと痛み、後でこらえ難い痒みに襲われる。果たして今日も数カ所刺された。虫よけ剤を身体中につけていったのだが。

夕方、薄暮の中で20代の女たち7人が教会前の広場でバレーボールの練習を始めた。私も20代ではないが誘われて参加した。女たちは自分のところへボールが来たら打つだけで各々のポジションから全く動かないからボールを追って走ることはない。ボールが遠くへ転がると取りにゆくのは見物している子どもたちだ。

ホキ(女 80代)が杖をつき、バッグをたすき掛けにして道を歩いてゆく。いつも白い服を着ているが今日は上下が趣の異なる柄物を着ている。右足が不自由らしく、着地している時間が左足に比べて短い。ゆっくりゆっくり歩いてゆく。どこに行くのだろうか。この村には彼女の実子、養子、きょうだい、そして彼らの家族が大勢住んでいる。養女のマリの家へ行くのかしら、息子のヘトアのところへ行くのかしら、などと思って見ていたら、末妹のイラの家へ入って行った。2~30分後に出てきて自分の家の方へゆっくりと戻っていった。彼女は80代だが痴呆なのか耳が遠いだけなのか分からない。教会へも行かず、人々が集まる場所へ出てきたことがない。

彼女は3回結婚した。最初の夫との間に15人の子どもを産んだが、最後の子どもを産んだ直後に、寡夫になったばかりで子どもがまだ幼かったウエアと姦通し(ウエアは姦通罪で捕まり罰金を払っている)、その後、夫と離婚してすぐにウエアと再婚した。彼との間には子どもは生まれず、間もなく彼は死んだ。3人目の夫との間にエフェ(女 40代)を産んだ。現在、彼女がホキ宅のうしろに家を建てて一家で住み、食事や洗濯などの世話をしている。3人目の夫はすでに死んだ。大勢の子どもたちはみなそれぞれ立派に家庭を営み、孫も沢山育っている。しかし彼女はいつも孤独そうだ。

この島の女たちは比較的早く子どもを産み始める。早く結婚するわけではない。子どもを産み始める年齢が早いのだ。20歳ともなると多くの女に出

産経験がある。そして結婚後は毎年あるいは隔年、産み続け、十数人産む。40代でももちろん産んでいる。現在、村では若年出産に加えて多産、頻産を中年期以降、脚の悪くなる女性が多いことと結びつけて語られている。確かに老年期の女たちの多くは杖をついたり、よたよたした足取りで歩いている。

今まであまり見かけなかった少女レベッカと知り合った。祖母タパイタの家に逗留しているという。タパイタの家には実娘ウネの息子たちや娘たちも住んでいる。そのうちの一人が未婚時代に産み、今は成人した者も住んでいる。中にはガールフレンドと一緒に住んでいる者もある。この様に孫その他が常時、数人逗留している。レベッカもオークランドの高校に通っているタパイタの孫だが、2週間の休暇を島で過ごしている。彼女はNZは嫌いでニウエが好きだという。でもハクブで彼女がしていることといえば、赤ん坊を借りて抱いたり、幼児と遊んだりしているだけで退屈そうに見える。しかし一見、退屈そうに見える生活がニウエ人にとっては理想的なのかもしれない。そういえば、NZから帰島するニウエ人たちがニウエでの生活を“easy” “simple”という言葉で表し、きわめて良い意味で捉えている。

(5) 了